

関根ゼミ・公式「論文執筆要領」

2001/9/25 初版、2003/3/13 改訂

2004/3/18 三訂、2004/11/11 四訂

この「論文執筆要領」（以下、「要領」）は、関根ゼミ所属の学生が卒論、独立論文を執筆する際の参照資料である。

学術論文はエッセイや感想文、報告書などとは異なる体裁をもっている。論文の評価は、その内容の善し悪しもさることながら、体裁も重要な評価対象となる。ここには、関根ゼミの学生が論文を執筆する上で踏襲すべき極々基本的な「作成作法」について書いてあるので、ゼミ生は必ず最低限守るべきこととして遵守してもらいたい。

なお、ここに書ききれない事柄も数多くあるので、不明な点は必ず教官に相談すること。

この「要領」は、適宜、増補改訂をおこなう予定である。ゼミ生は更新情報に注意されたい。

目次

※ 注意	2
1. 文章作成上の留意点	2
2. 論文の長さ	4
3. ページ設定	5
4. 目次	5
5. 章の書き出し／節・項などの配置	6
6. 本文中の図・表の挿入について	7
7. 本文中の引用表記について	8
8. 本文中の注釈箇所の表記	10
9. 謝辞について	10
10. 注（上記8. も参照すること）	11
11. 参考文献リスト（巻末）	12

※注意：

- (1) 論文の体裁などについては、学問分野によって細部に違いが出る場合もあるので、関根ゼミ以外の学生がこれを使用する場合は、注意を要する。
- (2) 「国際総合学類シラバス」に、卒論、独論の基本的な体裁についての記載があるので、必ずそれと併せてこの「要領」を参照すること。以下の文中に（「シラバス」参照）という記述がある場合、「国際総合学類シラバス」からの引用部分であることを示す。
- (3) 併せて、浜田麻里・平尾得子・由井紀久子著『大学生・留学生のための 論文ワークブック』（くろしお出版、2,500円）を参照することを勧める。
- (4) 11月半ばまでに第1稿を書き上げ、関根に提出すること（つまり、学類主催の「卒論中間発表会」の頃に第1項を書き終えること）。独論提出者に対しては、2学期中に指示する。卒論、独論ともに、学類の定める提出日間際に第1稿を関根にもちこんでも、指導コメントは困難である。
- (5) 研究を進める上で、文献研究は不可欠である。①すでに入手している論文や文献に掲載されている参考文献リストから次に読むべき資料の目星をつける。②インターネットを利用して検索する。その際、筑波大学中央図書館のウェブページで検索することは、その第1歩として当然であるが、そこで見あたらなくても、NACCIS-Webcat (<http://webcat.nii.ac.jp/>) で全国の大学図書館に所在されている文献を調べ、中央図書館を通じて借りることはできる（ただし、送料実費負担）。また、国立国会図書館 (<http://www.ndl.go.jp/>) は直接足を運ばないと閲覧できないが、日本一の蔵書数なので、これも有効である。また、アマゾンや紀伊国屋書店のウェブページにある文献検索も、文献の存在自体を知りたい時には結構役に立つ。検索は、考え得る様々な語句のパターンでトライすること。

1. 文章作成上の留意点

旧版の「公式執筆要領」では一番最後に掲載したが、執筆前に読んでおくべき事柄も多く含まれているので、新しい内容を盛り込むとともに、冒頭に移動させた。各項目はそれぞれ簡単かつ自明なものであるかもしれないが、これまでの卒論指導、査読の経験から、注意しておくべきことと判断して掲載した。

- (1)「**文章の乱れは思考の乱れ**」。これを座右の銘にしてもらいたい。
- (2)論文はエッセイや単なるルポルタージュではない。思いつきや感情に流される文章（情緒的記述）は、それが引用文であったり、概念として成立する場合を除いて用いない。
- (3)興味深いテーマであっても、それをやり始める時期、先行研究や資料類の多少、自身のフィールドワークによるデータの多少によっては、あきらめざるを得ないこともある。
- (4)対象となる社会現象を研究対象とするには、それにアプローチするための特定の視点（切り口ともいわれる）が必要である。そして、それを論文としてまとめるには、分析概念も明示しなければならない。単に事実を羅列し、特徴を指摘するだけでは論文とはいえない。
- (5)自分のオリジナルな意見を述べるためには、そこに至るまでの論理的必然性がなければならない（強引な論理展開をさけるために）。章と章、節と節、項と項、段落と段落、文と文の間には、「話」の必然性がなければならない。
- (6)自分が書こうとしているテーマに関係する先行研究について論じる章を、必ずもろけること。先行研究の検討は、自分の研究が関連する分野の中でどのような位置を占めるのかを述べ、研究の独創性や意義を明示するためにある。
- (7)自分の意見と、引用などを通じて記述する他人の意見とをきちんと区別して述べること。文中の引用表記を確実におこなう。
- (8)章や節を引用文で終わらせてはいけない。さまざまな引用を用いたとしても、それらを受けて、自分がその章（あるいは節）の目的に見合う結論をどのように考えているのか述べておかなければならない。
- (9) 2～3冊の文献のみに依存して論文を作成しない。
- (10)文章はなるべく短い文をこきざみにつなげていくよう心がける。長いセンテンスは論理的思考を継続する際の妨げとなりうる。
- (11)主語と述語を対応させる。卒論などを読むと、主語の曖昧な文をよく見かける。
- (12)つねに論文の目的と結論部分の整合性に留意する。
- (13)「です」「ます」調の文体は禁止（ただし、「」でくくる引用の場合を除く）。

(14) 氏名に「様」「先生」「教授」「さん」「氏」などの敬称は避ける。ただし、たとえば「筑波大学教授の〇〇は、・・・」というように地位表記が必要な場合はその限りではない。

(15) 専門用語や、論理展開において不可欠な概念については、必ずそれらを説明する章、もしくは節や項がなければならない。

(16) 句読点の前にカッコやかぎカッコがつく場合の書き方に注意。

○→「 」。 or 「 」 [関根 2001:198]。 ×→「 。」

(17) 年号は原則として西暦を半角で用いる。元号は必要に応じて西暦に併記する。

たとえば、1989年←これが原則。1990（平成2）年←例外。

(18) 漢数字は原則として使用しない。数字は半角を用いる。

(19) 数の表記は以下の通り。

- ・1,000（○）、千（×）
- ・2万5,000（○）、25,000（×）

(20) 記号は以下の通り。

％、ha. km m cm km² m³ など。

(21) 論文全体を通じて表記の仕方を統一する。たとえば、「とくに、本論において強調したい点は、・・・」という文があった場合、別の箇所でも「特に、本論において強調したい点は、・・・」と書いてはいけない。「とくに」と「特に」をどちらか一方に統一する。同様のことは、「それゆえ」と「それ故」、「つぎに」と「次に」、「よくみると」と「よく見ると」、「さまざま」と「様々な」、「くる」と「来る」、「いく」と「行く」、「さらに」と「更に」、「ただし」と「但し」など、「つぎに」と「次に」などにもいえること。どちらを選択するかは、多分に執筆者本人の嗜好によるところが大きい（ちなみに、関根は個人的にはひらがなを使う方を好んでいる）。

(22) 文末が進行形になる人がかなり多い（「～している」）。進行形で書いた方がよいところもあるが、なるべくそれを避けるようにして書くぐらいでちょうどよくなる。

(23) 論文の構想を完成させることも大事だが、ある程度骨格がみえてきたところでとりあえず書き始めてみることも必要である。頭の中だけで完全に組み立ててから執筆に入ることは難しい。書くことによってはじめて頑強な骨組みができあがるものである。

(24) 草稿を書いている時から、こまめに推敲をおこなうこと。1度や2度の推敲では

満足のいく論文にはならない。

(25)最終稿をプリントアウトする際、表紙のタイトルと、事務に登録してある論文タイトルを確認すること。一字一句同じでなければならない。カギ括弧のあるなしにも注意を要する。

2. 論文の長さ

(1)卒論：和文の場合、規定は 16,000 字以上（「シラバス」参照）であるが、関根ゼミでは「40,000 字以上 70,000 字以内」（本文および注や参考文献も含む）とする。

(2)独論：規定では 5,000 字以上（「シラバス」参照）であるが、関根ゼミでは「8,000 字以上」とする。

いずれも A4 横書きで、ワープロを使用すること。

3. ページ設定

(1)マージン設定：左余白 35mm（「シラバス」参照）、上余白 30mm、右余白 25mm、下余白 30mm。

(2)フォント設定：サイズ＝10.5 ポイント、和文＝明朝体、欧文＝Times New Roman、数字＝Times New Roman。

(3)ページ数字：下余白内の中央位置（下余白 20mm とる）に入れる。フォントは本文の数字フォントと同じが望ましい。

(4)スタイル：1 ページ行数＝30 行、1 行字数＝38 字。1 ページ 1140 字。

4. 目次

目次には、章、節、項までを載せる。

（例）

目 次	
第 1 章 序論	1
1. 研究の目的	1

2. ソロモン諸島国とイサベル島の概況	-----	4
(1) ソロモン諸島国	-----	4
(2) イサベル島	-----	9

図目次

図 1	ソロモン諸島国	-----	1
図 2	ソロモン諸島におけるロギング企業分布図	-----	10

表目次

表 1	主な商業用熱帯樹種	-----	23
表 2	A氏の略歴	-----	31

- (1) 章には「第～」とつけるが、節と項には「第」をつけない。
- (2) 節は全角数字、項は半角の（ ）数字。
- (3) ページ数を忘れずに入れる。
- (4) 目次の後に、図目次と表目次も入れる。
- (5) 目次、図目次、表目次のフォントサイズを 15 ポイントにして、センタリング。
- (6) 目次タイトル（センタリングしたやつ）の後、2行あける。

5. 章の書き出し／節・項などの配置

第 1 章 序論

1. 研究の目的

本研究はソロモン諸島国（図 1）でおこなわれている大規模開発事業の導入・実施過程における政治的力関係の考察を通して同国地域社会におけるリーダーシップのあり様をさぐるとともに、最終的に、現代メラネシア島嶼国民が抱く経済開発の概念を提示することを目的とする。

ソロモン諸島国民が、・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

.....。

2. ソロモン諸島国とイサベル島の概況

(1) ソロモン諸島国

1) 一般的事項

ソロモン諸島国は、南緯 5 度から 13 度、東経 155.5 度から 170.5 度の範囲に位置し、.....。

2) ソロモン諸島略史

ソロモン諸島がヨーロッパ人に知られるようになったのは、1568 年 2 月 7 日にスペイン人の探検家アルヴァロ・デ・メンダーニャ (Alvaro de Mendana) の一行がイサベル島北東部.....。

- (1) 章のタイトルは、ページ最上部に 15 ポイントで書き、センタリングする。
- (2) 章のタイトルの後 2 行あけてから、節を設定して本文に入る。
- (3) 節のタイトルの次の行から文章をはじめてもよいし、節のタイトルの次行に項のタイトルを入れてから、本文にはいつでもよい。
- (4) 節と節の間は 1 行あける。
- (5) 項の前も 1 行あける。ただし、上の例のように節タイトルと項タイトルが連続している場合は、項の前に 1 行スペースをとる必要はない。
- (6) 章タイトル、節タイトルは強調文字にする。

6. 本文中の図・表の挿入について

本文中に挿入する図・表には、番号、タイトル、出所をつける。

(例えば)

..... (本文)

> 一行アケル <

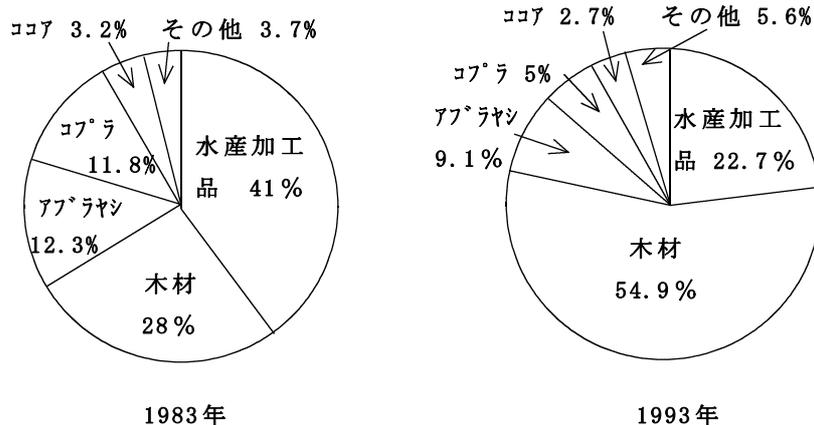


図5 1983年と1993年の主要輸出品目

([Central Bank of Solomon Islands 1994]より筆者作成)

> 一行アケル <

.....

..... (本文)

> 一行アケル <

表2 主要3言語における名称対照表

	親族集団	政治リーダー	戦士リーダー	宗教的権威
ザバナ語	ココロ	マネファア	マネヘタ	マネフィル
マリング語	ココロ	マエフネイ	マエネタ	マエファファラ
ブゴトゥ語	ヴィナフフ	ヴナギ	マダガイ	マネプヒ

(筆者の調査に基づく)

> 一行アケル <

7. 本文中の引用表記について

特定の文献、論文などから文章を引用した場合、必ずそれが引用であることを本文中に明示すること。自分の意見と他人の意見とを明確に区別すること。表記の仕方は以下の通りである。

(1) 基本事項

- ・ 出典は [] でくくる。その中に、著者名、発行年（西暦）、引用ページを記述す

る（例：[関根 1996:20]→関根が 1996 年に発行した文献あるいは論文の 20 ページからの引用）。ページ数が連続した複数ページにわたるときは、[関根 1996:20-22]とかき、飛びページの場合は、[関根 1996:20, 25]と書く。

・複数の文献を参照し、同様の内容をそれらから引用したとき（複数同時引用）は、
；でつなげる。なおこの場合は、当然、参考文献の文言をそのまま引用するのではなく、内容を卒論執筆者自身でまとめて引用する形式をとる。

（例）[Keesing 1978:116-117; White 1992:90]

・同じ著者の同じ文献から複数同時に引用するときは、
， でつなげる。

（例）[Keesing 1978:116, 120, 151]

・同じ著者の異なる文献から引用するときは、
， でつなげる。

（例）[Keesing 1978:29, 1992:110]

・ホームページから引用するときは、著者名やタイトル、執筆年がはっきりわかるものについては、通常の文献と同じ要領で文中に記載し、巻末の文献リストには、論文タイトルの後にアドレスをかき、最後に（ ）内にホームページを参照した年月日に記載する。それ以外で、webpage を参照し引用した場合は、注に入れる。いずれの場合でも、ホームページアドレスからハイパーリンクを解除する。

（巻末の参考文献リストの記入例）

関根久雄

2003 「民族紛争と NGO 活動」 <http://member.social.tsukuba.ac.jp/solomon.html>（2003/11/19 参照）。

（注の記入例）

注

(1) ソロモン諸島放送協会 (Solomon Islands Broadcasting Corporation) のウェブサイト (<http://sibcnews.co.sb/main/2003.2.html>) より (2003/12/2 参照)。

(2) 文献や論文から文章や文言をそのまま転載するとき①：比較的短文の場合。

（例文：）

開発人類学の基本的立場は、「否定的なインパクトを最小限におさえながら、文化的に適応した方法で、開発プロジェクトによる恩恵を地域社会の人びとにもたらず」

[Scudder 1987:206]ために行動する。

(例文終わり)

比較的短文の引用の時は、上記のように、文中内にその文の一部として挿入する。その際、引用部分をカギカッコ「 」でくくり、その直後に出典を[]内に記述する。

(3) 文献や論文から文章や文言をそのまま転載するとき②：長文の場合。

例文：

エスコバル(A.Escobar)は、第2次世界大戦後の新興独立諸国における低開発状態について、フーコー(M.Foucault)の言説論を援用しつつ説明する。

< 1行アケル>

低開発は歴史的産物であるが、それは今日の第3世界に対する支配を確実にするための、最もパワフルなメカニズムを構成する実践を引き起こしてきた。それらの実践は、西洋世界の言説によってつきうごかされていた。(中略)西洋世界による開発の言説の根幹には、「世界には富める国と貧しい国があり、富める国は自分たちの進歩のブランドを世界中に流布させる財力、技術力をもっている。そしてその力によって貧しい国は裕福になり、低開発世界は発展した国に成長する」という考えがある[Escobar 1984:384-385]。

< 1行アケル>

この開発の言説は、・・・・・・
・・・・・・。

(例文終わり)

引用が長文になる場合、このように1行あけたあと、2～3文字分おとして記述する。最後に出典を[]内に記入する。本文に戻るときは1行あけてから。

(4) 文献や論文の文章をそのまま使うのではなく、その内容を自分でまとめてから文中に挿入する時

(例文)

そして、やがて「第3世界国」の国民は自らの低開発状態を認識するようになり、開発の必要性を内面化させるのである[Escobar 1988:428-432; 足立 1993:20, 134]。

(例文終わり)

この場合、「」はつけない。参照文献が複数あるとき、上記のように、セミコロン（;）でつなげる。順番は、発行年の古い順。

(1) インターネット・ホームページからの引用の場合、本文中には注番号をつけ、巻末の注ページに、「誰のホームページなのか」、「アドレス」、「参照年月日」を記入する。注の付け方、巻末の注ページについては、「8. 本文中の注釈箇所の表記」および「10. 注」を参照すること。

(本文例)・・・である⁽²⁾。

(巻末の注ページ例)

(1) ソロモン諸島政府商業雇用貿易省ホームページ <http://www.commerce.gov.sb/>
(2003/2/26 参照)より。

8. 本文中の注釈箇所の表記

注には、「説明注」と「引用注」の2種類があるが、関根ゼミの論文では引用注を用いず、「注」＝「説明注」とする。

説明注は、本文に記述して説明するほどではないけれども、読み手に知らせておいた方が理解の助けになると思われる付帯的情報をさす。下記のように、本文には(1)(2)のような() 数字の連番を上付 1/4 角につける。注の中身は巻末にまとめる(下記の8. 述べる)。

(例文)

ソロモン諸島が属するメラネシア地域の政治リーダーは、一般に、「ビッグマン」(bigman)というピジンイングリッシュの名称で呼ばれてきた⁽¹⁹⁾。

(例文おわり)

9. 謝辞について

本文の結論部分が終わったあと、謝辞をつける。基本的な内容は、フィールドワーク先の人も含めて、テーマに関する研究をおこなう上でお世話になった人びと(通常は教官やゼミの仲間たち、調査地の人びと、構想や草稿に対してアドバイスをくれた他大学の先生など)に対する謝意を表する。

以下の例文は、私がある学術雑誌に投稿した論文に記した謝辞である。謝意を表する相手は論文の執筆者によって、また論文ごとに異なるので、あくまでも下記は「参考」程度にしてもらいたい。

(例文1)

本稿の内容に関する現地調査は、名古屋大学学術振興基金の助成を受けて2000年3月におこなった。とくに、ソロモン諸島滞在中にお世話になった国際協力事業団ソロモン諸島事務所(当時)の福島理恵子氏と協力隊員の皆さん、筆者が協力隊員時に勤務していたソロモン諸島国立博物館のL. フォアナオタ館長および館員の皆さんにお礼を申し上げたい。また、本稿の草稿を国立民族学博物館地域研究企画交流センターの連携研究会「オセアニアにおける国家統合と国民文化」(代表:須藤健一・山本真鳥)において発表した際、参加者の方々から多くのコメントやご批判をいただいた。あわせて謝意を表する次第である。

(例文終わり)

10. 注(上記8.も参照すること)

文中に上付1/4角の大きさの()数字でつけた注表示に対応する注の中身を、巻末にまとめて記述する。下記はその例。

注

- (1) 主な丸太の輸出先は日本と韓国である。1995年度には、ソロモン諸島から日本へ、約970,000m³の丸太が輸出された[Barlow and Winduo 1997:5]。
- (2) 1993年度におけるソロモン諸島国の主要輸出品目および輸出額は、(1)木材 SI\$230,353 (54.9%)、(2)カツオ・マグロ SI\$95,343 (22.7%)、(3)アブラヤシ油 SI\$38,079 (9.1%)、(4)コプラ SI\$23,111 (5.0%)、(5)ココア SI\$11,544 (2.7%)であった[Central Bank of Solomon Islands 1994]。
- (3) パラマウントチーフの地位は、第4章で述べるように、ヨーロッパ人との接触以前からある伝統的な肩書きではなく、イサベル島の言語にそれに相当する用語はない。ただし、現在の多くの人びとから初代パラマウントチーフと認識されて

いるモニロウズ・ソガの名前から、「ソガ」をそれにあてる場合もある。

(4)

1 1. 参考文献リスト (巻末)

注の後に、参考文献リストを必ずつける。これは、基本的には文中で引用した文献、論文についてリストアップするものであり、単に「読んだだけ」の文献（／論文）は除外すること。

リストでは和書と外書を区別せず、著者の姓に基づいてアルファベット順に並べる（下記参照）。英数は半角、日本語は全角で統一する。

参考文献

秋道智彌

1995 『なわばりの文化史－海・山・川の資源と民俗社会』小学館。

アミン、S.

1983 『不均等発展－周辺資本主義の社会構成体に関する試論』西川潤訳、東洋経済新報社。(Samir Amin, 1973, *Le Développement Inégal: Essai sur les Formations Sociales du Capitalisme Périphérique*. Orion Press.)

Bacanisia, A.

1992 Special Interview on the Environment: A Pacific View. *AMPO Japan-Asia Quarterly Review* 23(3): 33-36.

Clammer, J.

1985 *Anthropology and Political Economy: Theoretical and Asian Perspectives*.
London: The Macmillan Press Limited.

初瀬龍平

1987 「近代化論はどこへいくか」川田侃・石井摩耶子編『発展途上国の政治経済学』pp.124-144、東京書籍。

Keesing, R. M.

1982a Kastom in Melanesia: An Overview. In R.M.Keesing and R.Tonkinson (eds.),
Reinventing Traditional Culture: The Politics of Kastom in Island Melanesia,
Mankind 13(4) [Special Issue]: 297-302.

1982b Kastom and Anticolonialism on Malaita: 'Culture' as Political Symbol. In
R.M. Keesing and R.Tonkinson (eds.), Reinventing Traditional Culture: The
Politics of Kastom in Island Melanesia, *Mankind* 13(4) [Special Issue]:
357-373.

Nyamwaya, D.O.

1997 Three Critical Issues in Community Health Development Projects in Kenya. In
R.D.Grillo and R.L.Stirrat (eds.), *Discourses of Development: Anthropological
Perspectives*, pp.183-202, Oxford:Berg.

清水昭俊

1981 「独立に逡巡するミクロネシアの内情－ポナペ島政治・経済の現状より
『民族学研究』46(3): 329-344。

リスト内に記述される基本的内容は、著者名、発行年、タイトル、出版社であるが、和書と外書では若干異なる。また、単行本と雑誌論文の場合でも書き方に違いがあるので、注意を要する（下記参照）。

(1) 和書（単著本）の場合

（例）

秋道智彌

1995 『なわばりの文化史－海・山・川の資源と民俗社会』小学館。

（例終わり）

書名は二重カギカッコ（『 』）でくくる。その後には出版社名を書く。最後に句点（。）を付記する。

(2) 和書（編書）の場合

（例）

初瀬龍平

1987 「近代化論はどこへいくか」川田侃・石井摩耶子編『発展途上国の政治経済学』pp.124-144、東京書籍。

(例終わり)

発行年に続いて論文名をカギカッコ（「 」）でくくる。そのあと、編者名（複数の時は中黒 [・] でつなげる）『書名』（二重カギカッコでくくる）、論文の掲載ページ（最初と最後のページをーでつなげる）。句点（。）で終了。

(3) 和論文（雑誌論文）の場合

(例)

清水昭俊

1981 「独立に逡巡するミクロネシアの内情ーポナペ島政治・経済の現状より『民族学研究』46(3): 329-344。

(例終わり)

発行年、論文のタイトル（「 」くくり）のあとに、掲載雑誌名を二重カギカッコ（『 』）でくくる。掲載されている巻・号を記述する。上記の例は 46 巻 3 号を意味する。号数は（ ）でくくる。そして、セミコロン（:）のあとに掲載ページ数（最初と最後のページ）を書く。句点で終わり。

(4) 和訳本の場合

(例)

アミン、S.

1983 『不均等発展ー周辺資本主義の社会構成体に関する試論』西川潤訳、東洋経済新報社。(Samir Amin, 1973, *Le Développement Inégal: Essai sur les Formations Sociales du Capitalisme Périphérique*. Paris : Minuit.)

(例終わり)

著者名はカタカナで姓を書き、読点（,）のあと名のイニシャルを記入。

発行年、書名（『 』）のあとに、訳者名、出版社名を書く。そして、原著名も（ ）内に記入する。順番は著者名、原書発行年、書名、発行地名、出版社名。

(5) 外書（単行本）の場合

(例)

Clammer, J.

1985 *Anthropology and Political Economy: Theoretical and Asian Perspectives*. London:
The Macmillan Press Limited.

(例終わり)

発行年、書名（イタリック）、発行地名、出版社名、ピリオド(.)をつけて終わり。

(6) 外書（編書）の場合

(例)

Nyamwaya, D.O.

1997 Three Critical Issues in Community Health Development Projects in Kenya. In
R.D.Grillo and R.L.Stirrat (eds.), *Discourses of Development: Anthropological
Perspectives*, pp.183-202, Oxford: Berg.

(例終わり)

発行年、論文名、編者名 [編者名の前に In をつけ、編者名のあとにカッコ書きで(ed.)
か(eds.)の文字をつける。編者が1人のときは(ed.)、複数のときは(eds.)]。その次に
書名（イタリック）、論文掲載ページ、発行地名、出版社名、ピリオド(.)をつけて終
わり。

(7) 雑誌論文の場合

(例)

Baeania, A.

1992 Special Interview on the Environment: A Pacific View. *AMPO Japan-Asia
Quarterly Review* 23(3): 33-36.

(例終わり)

発行年、論文名、掲載雑誌名（イタリック）、巻・号（号数はカッコでくくる）、セ
ミコロンのあと掲載ページ数。ピリオドで終わり。

(8) 1人の著者が同じ年に論文（あるいは本）を出している場合

(例)

Keesing, R. M.

1982a Kastom in Melanesia: An Overview. In R.M.Keesing and R.Tonkinson (eds.),
Reinventing Traditional Culture: The Politics of Kastom in Island Melanesia,
Mankind 13(4) [Special Issue]: 297-302.

1982b Kastom and Anticolonialism on Malaita: 'Culture' as Political Symbol. In
R.M. Keesing and R.Tonkinson (eds.), Reinventing Traditional Culture: The
Politics of Kastom in Island Melanesia, *Mankind* 13(4) [Special Issue]:
357-373.

(例終わり)

発行年に a b c と順番につける。